

'85—2

北海道民族学会通信

北海道民族学会

札幌市北区北10条西7丁目
北海道大学文学部行動科学科社会生態学講座内
(011)716-2111内線4163

題字：椿坂小籬(点の会所属)

編集：菅原和孝・口蔵幸雄

発行者：岡田宏明

印刷所：㈱北海道機関紙印刷所

国際シンポジウム——●

B. ピウスツキ古蠟管とアイヌ文化

黒田 信一郎¹⁾

上記のシンポジウムについては新聞やTVが報じたので、すでに御存知の会員の方々もあるいはおられるかと思う。ここでは、道民族学会の観点から今後の展望ともからめて、ご報告させていただくことにしたい。

北大主催のシンポジウムは、北方圏センターとの共催、そして実質的には国立民族学博物館と共同運営のかたちをとった。こうなった理由は、「大学が特色ある研究テーマについて内外の研究者の参加をえて国際シンポジウムを開催し、国際的な研究水準の向上と学術の国際交流に寄与することを目的とする」との趣旨にそって、文部省が北大にたいして開催経費の助成を決定したことによる。昨年四月に実行委員会が生まれ、委員長に朝倉利光教授(応電研)、副委員長に岡田宏明、村崎恭子の両教授が選ばれ、他に9名の委員によって構成されることとなった。その時以降、9月中旬の開催にむけて、組織・経費・運営をめぐって20回余の会議が開かれた。幸いにも、私共の苦勞は報われた。というのも、外国から8カ国・19名の第一線の研究者を迎え、127名の国内参加者をえて、この種のシンポジウムとしては実に盛会となった。本道とも因縁の深いコロンビア大学のアウスターリッツ教授が、いわばトリックスターよろしく陰に陽に会議を支えてくださったのはありがたいことであった。シンポジウムの前日に市民のための記念文化講演会が開かれたことから

も、この企画が真にパブリックなレベルで実行されたと評価できると思う。そして、シンポジウムの全体に、道民族学会メンバーの20余名が何らかのかたちでかわり支えたのである。だから、実質的には道民族学会にとって事業の一環をなしたと位置づけることもできよう。

はじめてピウスツキ蠟管に着目してからシンポ



ジウムにこぎつけるまで8年の歳月を要した。そして、近々、シンポジウムと総合科研の成果が各々、北大と民博から出る運びとなっている。しかし、これらは言うならば中間段階の決算にかわるものであって、最終目的として私共はピウスツキ全集(6~8巻)の刊行を計画している。この計画を実現するには、ピウスツキの民族学と言語学の業績を洗いざらい吟味し研究することが欠かせない。だから、従来と同じように今後も共同研究の

かたちをとることになり、しかも、各巻の編集責任者として私共のうち何名かが予定されている。このように、ピウスツキの共同研究をとおして本学会のメンバーが互いに連携できるというのは、学会の発展のためにも喜ばしいことであろう。ただし、計画が実現するまでには更に10年はかかると思われる。おそらくマラソンの観を呈するにちがいない。途中で息切れしないように心がけたいものである。

1985年度 第1回研究会発表要旨———●

開拓村落における氏子圏と村落祭祀の類型(試論)

鷹 田 和喜三¹⁾

日本農村社会学の樹立者、鈴木栄太郎は北海道には「農民の村落がないのが原則」という見解を発表されたが、その村落とは自然村の理念型で把握される村落と考えられる。氏は社会意識共同の地区が自然村の地区で、その最も具体的な標識として氏子集団の圏を指摘し、「氏神の神社は自然村」と強調され、新しく村が発生する場合、独立の氏神を持つことがその資格を自他共に認めることであると述べる。同じ文化圏に属していても、各地から移住者が集り、人為的に開拓され、村落の形成過程や風土条件が異なる北海道の農村では、氏神の神社はどのように創建され、氏子集団や祭祀組織はどのように形成され、村落の社会的統一とかかわり合っているのだろうか。私はこの問題は府県の伝統的農村に対比して、北海道の開拓農村の特質とその社会的性格を把握する為に、重要な研究課題と考え、各地の実態を調査している。北海道に多い個別入植村落では氏神の神社が所在しない部落も多く、所在しても春、秋の祭典以外の祭祀は行われない場合が多いようで、氏子集団と祭祀組織は入植形態、村落の形成・展開過程・神社合祀政策などにより、地域や部落ごとに相違が見られ、府県の農村に比較して多様性があり、自然村の理念型のように「氏子たる事が則ち村民たる事と同意義」と一般化することはできない。

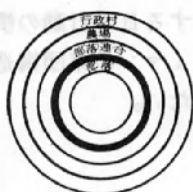
団体入植村落では、母村ないし出身県の著名な

神社から御分霊を受けて氏神神社を創建し、母村の祭祀を継承している部落が多いようである。やや特殊な事例を紹介すると、名寄市曙部落には2つの神社と氏子集団があるが、この部落は明治33年の同時期に、山形団体と相馬団体(福島県から)が同時に入地し、山形神社と相馬神社を創建し、遅れて入植した他県人はいずれかの神社の氏子集団に加入し、前者の祭典は9月1日、後者の祭典は7月2日に行われてきた。1部落に2社が所在するのは部落の統一の妨げになると理由で、山形神社の祭典の9月と相馬神社の2日を合せて、9月2日に同時に行うことになったが、この事例は入植団体の結集性と伝統の強さを示していると考えられる。兵庫団体が入植した静内町豊畑部落には氏神神社も、従って氏子集団も存在しない。この団体は明治18年に兵庫県三原郡(淡路島)の広田村出身者を中心とした33戸で構成されたが、日本には珍しい宗教移住団体であった。団体員はすべて日蓮宗の「本門仏立講」の熱心な講中であり、移住の動機は信仰の法灯を守り北海道の新天地でその生活を確立するためであった。この部落では神社に関する祭祀はないが、仏立講の講組が入植以来8組に組織され、近隣の講中が5~10戸位ごとに、毎月5日と24日に講会が開かれ、講中の全戸が出席する。

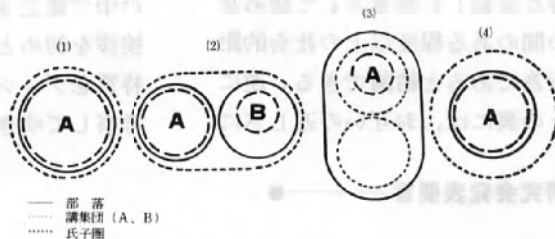
戦前期には北海道には小作農場が多くあったが、各農村単位に(現在それは1部落の場合もあ

れば、数部落にまたがる場合もある) 神社が創建され、農場主や集団入植した小作人の出身地の神社から御分霊を受けた例が多いようである。例えばその代表的な大農場で知られる雨竜町の蜂須賀農場は明治26年に開場されたが、33年に農場の守護神として、蜂須賀家の先祖を祭神とする徳島県の国瑞彦神社の御分霊を勧請し、同名の神社を創建した。そして同村の戸田農場や町村農場の小作人が増加するにつれ、大正4年に雨竜神社と改名し、村社に昇格され、氏子圏は雨竜村全体に拡大された。また戸田農場に集団移住した富山県出身者16戸も八幡神社を創設し、農場地区内で祭祀したが、大正期に雨竜神社に合祀された。上川郡鷹栖町には小作農場が大小合せて、23カ所あったが、現在、町内には神社が14社ある。大多数が

第1図 氏子圏の類型



第2図 氏子圏・部落・講集団の関連



旧・農場単位で創設され、旧農場地区で祭祀されている。

大規模な会社組織による入植村落においても、氏子圏は団体入植の範囲となっている。例えば、興復社が入植した豊頃町の二宮農場では8つの部落があるが、報徳二宮神社は農場合同で祭祀されている。同じく北越殖民社が入植・開拓した江別の野幌部落の野幌神社の氏子圏も入植地の範囲である。他方、屯田兵村は1村に1社が創され、旧・納内村に納内神社のみ所在し、氏子圏は行政村の範囲であり、府県農村とは異なる。

以上の諸事例は第1図のように図式化でき、また

氏子圏と部落(行政区)と講集団(祭祀組織)の関連は第2図のように模式化でき、調査が進めばもっと多くの類型化が可能と考える。

ブッシュマンの訪問活動と挨拶行動

菅原 和孝¹⁾

ボツワナの狩猟採集民セントラル・ブッシュマン(サン)は、現在、政府の遠隔地開発計画(RADP)によってコイコムの井戸の周囲に定住し、周辺から流入してきたカラハリ族も混じえて総数約500人にのぼるコミュニティを形成している。本報告では、1984年7月～85年1月の調査に基づいてコイコム定住地におけるブッシュマンの訪問と挨拶の様態を分析する。定住生活とは、自律的な狩猟採集経済と密着していた従来の離合集散的な集団編成の対極をなすものである。定住地におけるブッシュマンの訪問活動の実態を把握することは、定住化に伴う社会関係の変容を解明するうえで有効であるばかりでなく、狩猟採集民の集団への帰属性を理解する手掛かりを与えるであろう。

セントラル・ブッシュマンはグウィとガナという二つの語族に属するが、私が観察対象としたのは総数約30名からなるグウィのキャンプであっ

た。このキャンプへの日々の訪問者のリストを分析すると、男性の方が女性よりもずっと頻繁に訪問してくることがわかった。ただしこれは男性では、未婚の青年の訪問が女性に比べてはるかに多いためである。また男性訪問者の接近に際して挨拶が行われたのは40パーセントにのぼるが、女性訪問者ではわずか9パーセントの事例で挨拶が見られたにすぎない。さらに女性の訪問の多くは女性どうしの血縁関係に基づいているのに対し、男性の社交範囲は血縁関係ひいては言語集団の枠を越えた広がりを見せていた。

訪問者に特有な空間的位置どりから見て、キャンプとは非居住者たちに対して一種の「マイクロ・テリトリー」として機能していると考えられる。挨拶とは、基本的にはマイクロ・テリトリーに外部の者が侵入したときこの者と内部の者との間で交される相互行為なのである。ブッシュマンの挨拶の基本型は口頭でなされる一対一のやりとりで

あるが、その前に「開始の挨拶」が訪問者によって場全体に投げかけられることが多い。また一対一のやりとりのあとに「公式的挨拶」が続くことも稀にある。挨拶行動のプログラムの基本的特徴の第一は、場への訪問者の参入は居住者の「無視」によって迎えられることであり、第二は、そのあとに挨拶を改めて開始する権限は居住者のほうに優先的に割り当てられているということである。

一対一の挨拶の全事例の80パーセント以上は成熟した既婚の男性どうしで起こっていた。また同一キャンプの居住者間で挨拶がなされることも、血縁親族間でなされることも皆無に近い。これらのことから、ブッシュマンの挨拶とは成人男性どうしがお互いを対等な成熟した他者として認め合うと共に、お互いの間のある程度以上の社会的距離を確認する相互行為であると結論できる。逆に挨拶を行わないことの裏には、お互いの近しさに

対する相互認知が働いている。このような「近しさの相互認知」とはブッシュマンにおいては、まず何よりも現に同一キャンプに共住しているという事態に基礎をおいているのである。

ブッシュマンは挨拶にある種の「こだわり」をもっている。このような「こだわり」が透けてみえる様々な社会的文脈が観察される。なかでも重要なのは、挨拶を行うことが一種の逸脱とみなされる文脈である。また挨拶の円滑な進行が妨げられて当惑が生じることもある。このような文脈のエピソード的な記述も挨拶行動の特質を理解するうえで有効な方法である。ブッシュマンの挨拶の「慣習的プログラム」は離合集散的な社会生活の中で確立されたものと私は考えている。今後、挨拶を初めとする日常行動の慣習的プログラムの特質をブッシュマンの集団構造の中に位置づけて考察してゆきたい。

1985年度 第2回研究会発表要旨

南スラウェシ、ブギス族の市と村

伊 藤 眞¹⁾

以下に述べるのは、筆者が1984年8月から1985年2月まで滞在した南スラウェシ州ソッペン県における調査報告である。ブギス族は、インドネシア島嶼部各地に建設したコロニーや、巧みな航海者として著名である。また、従来の慣習法研究では、彼らの社会は、神器が果す共同体結合における中心的役割によって「神器奉戴共同体」

(ornamentschap)とも規定されてきた。しかし、インドネシア独立後の彼らの社会の変貌については、民族誌的モノグラフが極めて乏しいため、知ることが出来ない。このような点を考慮し、市を中心に、今日の彼らの村落について概観したい。

ブギス族は、一般にロンタラと称される彼ら独自の文字による文書をもつ。それにより彼らの歴史を復元することもある程度可能である。ここにいくつかのメルクマールを挙げるならば、17世紀初頭におけるイスラム化、1667—69年のマカッサル戦争における東インド会社によるマカッサル占領、また今世紀では、1905年オランダによる植民

地化、更に独立後のカハル・ムザカールの内乱(1952—66)などがある。とりわけ、この10年余に及ぶ内乱状態は、国土を荒廃させ、伝統的価値の喪失を招来させるなど、その影響は大きい。

ソッペン県は、他県と同様、従来の王侯国を基礎とし、オランダ植民地化以降においても、独立に至るまで38代続いたソッペン王を最高の政治的統治者として仰いだ。初代の王は、天より下った者(tomanurung)とされ、その王の毛髪、剣、槍などが王国の神器として両性具有的祭司によって祀られてきた。このような神器は、国レベルにとどまらず、現在の村レベルにも見出されるが、もはや殆ど省みられることはない。その多くは、内乱期に盗難・破損されたりしたが、神器への信仰・儀礼がイスラムの教義に抵触するという認識が普及したことが、その大きな理由である。例えば、筆者の滞在した村では、戦旗が神器であると考えられているが、それを管理するのは祭司でなく産婆である。また、その儀礼が村レベルで行な

われたことを記憶する者も既にいない。もし今日、統合の中心として神器に代わるべきものを挙げるとすれば、各村の各集落に必ず見出しうるイスラム寺院になろう。

形態的に村の構成要素を見た場合、田畑、泉・川などの水源のほか、市がある。ソッペン県は5郡21村に分かれるが、市の数は総計26であり、1村に必ず1つは市がある勘定である。ここでは、ウジュン・バンダン市（南スラウェシ州の州都、旧称マカッサル）市と対比しながら、それらの特徴を見ることにしよう。第一の特徴は、その周期性である。ウジュン・バンダン市は、1971年、隣りのマロス県から編入された一つの市を除きすべてが常設市であるのに対し、ソッペン県では、すべてが定期市であり、7日を単位とする。毎週、一定の曜日に通常、1度ないし2度開催され、しかも曜日によって規模が異なる。賑やかな方が大市、もう一方は小市と呼ばれ区別される。実際、

小市にやって来る商人はといえば、資本の限られた野菜売り、魚売りで、しかもすべてが同じ村民である。これに対し、他の比較的資本のある商人たちは、小型トラックをチャーターし、曜日毎に市を移動するのである。市の周期について付言すると、オランダ統治以前、ブギス族社会の殆どの市は5日周期であった。その日順は吉凶占いと結びつき、現在でも人々に記憶されている。第二の特徴は、コミュニケーション上の役割である。農村部では、市日か否かにより、当日の交通量・ルートが変化する。また、これほど多数の人間を参集させる機会是他に無く、情報交換や出会いの場ともなる。着飾った女たちは、それに花を供えるものだろう。

都市の市に比べ農村の市はより開かれたものである。それは、誰にも「売る権利」を与える。そして、単に経済的機能ばかりでなく、依然として社会、文化的機能も担っているといえるであろう。

ポーランドにおける民族学事情

和田 完¹⁾

一昨年10月から昨年7月まで、文部省の在外研究員としてポーランドのアダム・ミツキエヴィチ大学に滞在する機会をえた。この大学は、ポーランド第5の都市である人口60万弱のボズナニ市に置かれている。ボズナニは主都ワルシャワから特急で3時間余、ベルリン経由で西欧に通じる幹線鉄道上にあり、ポーランドを代表する農工業都市の一つといってよい。アダム・ミツキエヴィチという大学の名は、19世紀に活躍したポーランド最高の詩人にちなんだものであり、1919年開校と比較的新しいが伝統のある大学である。しかし、われわれに最もなじみ深いのは、ピウツスキの蠟管がこの大学の収蔵庫で発見されたことであろう。

昨年9月に北大で開かれたピウツスキの蠟管にまつわる国際シンポジウムには、蠟管の第一発見者であり当大学の言語学研究所々長イエヂ・バインチェロフスキ氏と、蠟管の事実上の紹介者であるアルフレット・マイエヴィチ氏が参画されていたことは耳新しいであろう。私がミツキエヴィチ大学に滞在したのも、このピウツスキの資料と

の関わりからであり、実際に席を暖めたのもこの言語学研究所の一室であった。正直いって、ポーランド語の習得にきゅうきゅうとするあまり、ポーランド民族学の現状を通覧する余裕など全くなかったのだが、身の回りで見聞した若干の事実を以下にしたためよう。

ミツキエヴィチ大学にも「民族学研究所 Instytut Etnologii」が設置されている。現所長はズビグニェフ・ヤシェヴィチ Zbigniew Jasiewicz 教授で、氏はアフガニスタンの社会人類学的研究を進められていたが、ソ連のアフガン侵攻以降における現地調査の挫折を訴えておられた。マレク・カヴェンツキ Marek Gawecki 助教授はイスラム圏の経済人類学的研究を手がけ、特に伝統的市場経済の比較研究をテーマとされていた。氏はまた、「ポーランド民族学会」の副会長でもある。ガヴェンツキ氏の奥さんであるダヌータ Danuta 女史の医人類学的研究には特に個人的な興味をひかれた。同女史はアフガニスタン調査に基づくいくつかの民間療法に関する論文を発表して

いる。その他、西アフリカの部族社会における農業組織の研究とか西インド諸島の宗教現象に関するモノグラフ等も散見されたが、非ヨーロッパ圏の研究としてはアフガニスタンを中心とするイスラム文化が当研究所の共通のテーマといつてよい。

もちろんポーランドの民俗学的、文化史的研究や、スラブ民族と他の西欧諸民族との比較民族学的、社会人類学的研究も活発に行なわれていた。また、ゾフィア・スタシュチャク Zofia Staszczak 助教授の指導下で進められた「民族学用語辞典 *Slowmik Poje'c etnologicznych*」の作成は特筆すべきものである。

ミツキェヴィチ大学以外の研究機関の民族学的研究の動向については、残念ながら詳述できない。しかし、1983年3月にウッチ大学で開かれたポーランド民族学全国大会についての手元にある発表論文資料によれば、おおよその研究動向を推察することはできる。このポーランド科学アカデミー主催の大会には、全国の主要な民族学関係の研究機関から代表がウッチ大学で一堂に会し、ポーランド民族学の現代における諸問題を論じている。取り扱われたテーマの一端を示せば、

文化概念の規定、象徴文化の研究の問題点、ポーランドの民族神話の研究、ヨーロッパにおける家族文化、ポーランド農村における親族関係、都市における労働者文化の研究、民族芸能の社会機能、農村における儀礼的贈与、農村の祭り、ジプシー文化、ポーランドにおける新大陸研究、スラブ民族の系統論としてのマケドニア研究、中央アジア遊牧民の遊技と競技、等々。問題は、社会人類学、民族神話学、民俗学から、都市人類学、象徴人類学と多岐にわたるが、特に西欧の民族学や米国の文化人類学とへ深い関わりが、ソ連における民族学の事情と著しい対比をなすといえよう。事実、ミツキェヴィチ大学の研究所の書架にも多くの西側諸国の学術雑誌が並んでいるのが目立った。ただし、われわれに非常に関心の持たれる北方ユーラシア研究は、かろうじて最後に挙げた中央アジアの遊牧に関するものだけであった。この研究は1965年以来、ポーランド科学アカデミーのモンゴル調査隊によって毎年行なわれた遠征の成果に基づくもので、今日の数少ない北方研究とみなしうる。

ポーランドの民族学に関する最も権威ある学術

雑誌は「ポーランド民族学 *Etnografia Polska*」である。これは、ポーランド科学アカデミーの施設である「オッソリネウム *Ossolineum*」の出版局から出版されている。この施設の正式名は「オッソリンスキ *Ossolimski* (設立者の名) の名を冠した科学研究所」で、1817年以来、文献や博物館資料の収集、研究施設の設立、出版事業等に携わっている研究支援機関であり、現在はポーランド第4の都市であるヴロツワフに本部が置かれている。このヴロツワフの大学にはシベリア研究で著名なアントニ・クチンスキ *Antoni Kuczyński* 氏がおられる。昨秋のピウツスキの蠟管のシンポジウムにも招聘されていたが、氏の参加が実現しなかったのはいかにも残念である。氏はまた、前記の雑誌「ポーランド民族学」にポーランド人の残した古いシベリア民族の研究報告を紹介しているが、この種の研究も最近の版でみかけることはない。

今日、ポーランドで出版されている研究の中で、北海道の民族学徒に最もなじみ深いのは、やはりアルフレット・マイエヴィチ氏の一連のアイヌ研究であろう。氏については多言を要すまいと思うので、以下に氏のアイヌ関係業績の若干を挙げ本稿を終えることにする。

Alfred F. Majewicz :

- 1981. "Concerning the Ainu in Kamchatka." Adam Mickiewicz University. Poznań.
- 1982. "On the History of Studies on Ainu" Adam Mickiewicz University. Poznań.
- 1983. "Dzieje i legendy ajnów". Warszaw. (アイヌの歴史と説話)
- 1983. "Dzieje i legendy ajnów. Indeks-Słownik". Adam Mickiewicz University. Poznań. (上掲書の索引とアイヌ語彙)
- 1984. "Ajnu. Lud, jego język i tradycja ustna". Poznań. (アイヌ民族、その言語及び口承文芸)

編集後記

本年度第1、2回の研究会の成果として4つの発表要旨をお届けいたします。伊藤真氏は昨秋帯広畜産大に赴任されました。帯広の地にも文化人類学の新たな拠点が築かれつつあることを喜ばしく思います。なお刊行が遅れておりました「日本民族学の回顧と展望('64~'83)」は年度内に出版の見込みです。

平久保 隆 (S)